

古代史散策

No. 24改

紀伊北部

和歌山市・海南市

パナソニック電工松寿会
古代史散策部

昭和47年11月作成

平成27年9月改訂・復刻

〈コース〉

京阪守口駅前 = 〈近畿道・阪和道〉 = 藤白神社 =
室山古墳群 = 紀三井寺（昼食） = 玉津島神社
= 和歌山城 = 総持寺 = 大谷古墳 = 〈阪和道・
近畿道〉 = 京阪守口駅前 …解散
※自動車道の途中適宜トイレ休憩をとります。

〈総説〉

南国の陽光をいっぱいを受け、黒潮岸を洗う南の国、
それはイタリアオペラ“ミニオン”に、

“君よ知るや オレンジの 黄金に輝く国を！”
に歌われる、そのものの紀伊の国である。

遙か一万年以上もの大昔から、人類の祖先が、この暖
国の海岸沿いに住みついて生活を営んでいた事は、和歌
山市大池、日高川流域付近、芳養川下流の数ヶ所で、ま
だ研磨技術を知らぬ土器時代の旧石器が、出土したこと
で明らかである。遺跡の一つ、日高川流域の「松瀬先土
器遺跡」は、大型石核8個、チャート剥片19個、サヌカ
イト片5個、その他石刃、剥片の出土で名高い、剥片中
には使った跡も見られる。

縄文時代に入ると、その集落跡は73ヶ所見つかってい
る。紀ノ川沿いが最も多く、有田川、日高川沿いや紀南
の熊野川沿いにも多存し、その内には貝塚を伴った遺跡
もある。最も古式の押型文尖頭土器（近畿最古）が出土
した、縄文早期遺跡の「高山寺貝塚（紀伊田辺）」や、
前期、中期、後期、晩期に亘る、夫々の時代に対応する
遺跡・遺物が発見されており、数千年に及ぶ人類の足跡
を存している。特に日前宮（日前・国懸神社）の東方約

2 kmの鳴神貝塚は、近畿最初の発見地として名高い。

稲作が始まった弥生時代は、紀ノ川流域に特に多く営まれ、有田川、日高川、田辺市、西牟婁郡にも広がっている。日前神社の西に接する太田と、その北方黒田に跨る広大な地域の弥生遺跡は県下最大の規模で、弥生時代から古墳時代、さらに奈良・平安に及ぶ複合遺跡であることは、この地一帯が水田農耕の好適地であったからである。

紀ノ川北岸の“宇田森遺跡”は弥生中期のもので、直径200mにも及ぶ大集落跡であり、ほぼ円形の竪穴式住宅も数戸発掘され、焼き米も出土した。その土器は東瀬戸内のものに類似し、大和や河内の影響は見られない。しかし、弥生末期となるにつれ、大和で盛んに見られる櫛描文などが同時に用いられ、大和との文化の交流を如実に物語っている。

宇田森の東南、紀ノ川の河川敷から銅鐸が出土した。先の焼米とともに、弥生人の末路を暗示しているのではなかろうか。

【紀伊の国】

古代南海道の起点紀伊国は、大化以前の7世紀中葉頃迄は“木の国”と“熊野の国”に分かれていた。その“木の国”の北部の旧名草郡・海部郡（現和歌山市、海南市付近）を中心として、天岩窟神話の異伝を伝承した、紀直一族の蟠居していた処であり、出雲臣家と並ぶ一大地方豪族であった。中央貴族化した紀臣家とは異なるが、元来は同一祖神の天道根命を祭祀した同一種族であり、その伝統は古く且つ深い。その中心地名草郡は神郡と呼ばれ、後代に定められた延喜式中の大社は、他

郡に比して群を抜いて多く鎮座（13中9座）し、名草神郡は紀伊国の中心であった。国造の親任の儀式が、おそらく天武代から宮中で行われ、平安時代迄も続いて行われたのは、出雲国と紀伊国の国造家に限られ、その形式を、挙式に際して新任国造が読み上げた「神賀詞」

（祝詞と同意義）で比較すると、紀国造家のそれは、出雲国造家が行った大和朝廷への服属儀礼の形式は採っておらず、また、同家が祭祀した日前・国懸神社は、伊勢神宮と同格に近い社格を保持しており、紀国造家は、大和朝廷に対して特異の存在であったのである。

紀国造家は、「木の国」最大の穀倉地帯を抑え、林業地帯をも手中に収め、さらに「木の水門」をも扼して、紀伊の海部を勢力下に組み入れ、紀ノ川の河口を水軍の基地として瀬戸内を、さらに遠く玄海灘の波濤を蹴って朝鮮半島を、さらに超えて遼東、山東半島をも目指し得たのであろう。5～6世紀には、その強大な造船力と水軍力の故に大和朝廷（応神、仁徳）の朝鮮出兵に関わり活躍する。また、¹⁴仲哀天皇は、九州熊襲の反乱を討つべく、木の国の「徳勒津の宮」から船出され、その後神功皇后（息長帯媛）は、角賀（敦賀）より日本海を航して、穴門（長門）の豊浦津に夫仲哀と会したとあり、神功皇后が三韓を討ち、凱旋の時には「木の水門」から紀ノ川を溯って大和国に入ったと伝えている。仲哀・神功及びその皇子応神を補佐したという武内宿祢は、「紀国造の祖宇豆比古の妹 山下影媛を母として（父孝元天皇）紀の名草郡櫃原に生誕す」と伝承し、これらの説話が残るほど、紀氏と大和天皇家の絆は強かったのである。

大陸、特に古代朝鮮の影響の極めて強い副葬品を出す

紀ノ川沿いを中心とする古墳、特に夥しい数の群集墳は、おそらく紀国造家一族の奥津城（墓）ではなかろうか。

紀伊の古墳の特徴は、大和のそれと些か異なる特徴を示し、この国の独立性の強さを物語っている。しかし、古墳末期に近づくに従って、次第に大和の古墳の影響が強くなるのは、大和との関係を知る手掛かりであり興味が深い。

《 各 説 》

【藤白神社：藤代王子社】

海南市藤白

創建年代は不詳なるも、¹²景行天皇の御代の創建と伝えられる。熊野九十九王子社の一つ、藤代王子社の旧址で、「藤代神社」「藤白権現」「藤白若一王子権現」などと呼ばれた。主祭神、饒速日命を祖神とする穗積氏の嫡流、藤白鈴木氏が社家として代々神職を務め、鈴木姓の発祥の地とされる鈴木屋敷がある。

熊野三山（本宮…熊野牟須美神，新宮…速玉大神，那智…伊弉諾尊）が何時頃祀られたかは不明だが、平安時代に入ると、末法思想による極楽浄土、補陀落信仰と修験道が混在し、王侯貴族の間に熊野詣でが始まり、延喜7年（907）宇多法王の参拝以来龜山上皇まで、9代の上皇の行啓があった。

承久の乱以後は、朝廷公卿の力は地に



藤白神社

落ち、庶民の間に拡がり、蟻の熊野詣でとも蟻の戸渡りとも云われるに至った。

また、聖域熊野の入り口として、鳥居付近に「^{はらいと}祓戸王子社（祓戸王子跡）」が設けられた。

《熊野街道（熊野古道）》

熊野街道は、京都 南鳥羽から船で淀川を下り、難波八軒屋（現 天満橋付近）で上陸して、^{くぼつ}湍津王子一天王寺村一住吉一和泉を経て紀州に入り、海岸沿いに紀伊田辺を経由して熊野に到る参詣道である。

田辺からは、紀伊半島を縦断する^{なかへし}中辺路道と、さらに海岸沿いに新宮一那智社を^{おおへし}経る大辺路道の二道に分かれている。

道中100里（約360km）20日間の長旅の処々に、旅の安全の祈願と休息の場として、九十九王子社が置かれていた。この中、藤代王子社は、泉州^{もろい} 榑井王子社（泉佐野市），紀州^{きりぬめ} 切目王子社（印南町），滝尻王子社（田辺市），^{ほっしんもん} 発心門王子社（田辺市）と共に、五体王子社と云われて特に重視した。

王子社で催された歌会の歌を書き残したのが、熊野懐紙で、建仁元年（1190）10月9日の後鳥羽上皇の熊野懐紙は特に名高い。

【室山古墳群：県史跡】

海南市黒江

市内の大山（尾山）97mの丘陵尾根から頂上にかけて室山一号墳・二号墳など7基の円墳が点在し、室山古墳群と呼ばれる。埋葬施設の形式は横穴式石室と竪穴式石室とがあり、いずれも6世紀後半～7世紀始めの築造である。